

戦犯刑死者の表現形態

西野 広祥

――処刑を目前にして

ニュートラルな心理状態にあった者が何らかの事情で自らの死を具体的に意識させられたとき、世界がどう見えてくるか。日の光から生きとし生けるもののすべてに今までとは違った見方ができるようになる。万物の一つ一つが新鮮で、こよなく愛すべき存在に見えてくる。ということ、古い世代の多くは志賀直哉の『城之崎にて』から知ったのではなからうか。

私が眼の前に行っている『世紀の遺書』（昭和二十八年、講談社刊）という書物は、死刑判決というかたちで自ら

の死を目前に行っている人たちの遺書。われわれは、古い先例として司馬遷の『任少卿に報じるの書』（文選）を見るが、なにしろ『世紀の遺書』は刑死した一〇五八名の中から、七〇一名によるいろんなかたちの遺書を集めている。このうち、昭和五十八年の再版の際には三七名の遺書が、遺族の意志によつて削除されている。ふたたび活字になるのを見るに耐えなかつたのであろう。

司馬遷は宮刑という死よりも忌まわしいとされる「生」を選び、『史記』を書くことができた。『世紀の遺書』の遺書を書いた人々のなかにも、もしそうした選択の道が残されていたなら、あえて忌まわしい生を選び、書き残したい人もあつただろう。

その一篇、一篇に、いや、その一言一句に凝縮された内容が垣間見られ、あるいは隠されており、その一つ一つを読みつづけることなど、われわれ凡人の精神力では耐えきれないことだ。どのかたちの遺書にも、一読、膚を寒からしめる事実の堆積とリアリテイがある。その中から、平和に慣れきった現代人でも、なんとか読みつづけられるものを選んでみる。まず、自らの異常な死の淵を覗いて、何を見つけ、味わい、そして思ったか。

例その一

「七月二十三日 火曜日 曇一時小雨

『もうこれで済南の市街も見納めだな』と無理に意識していてもどうもピンと来ないのが不思議でした。何かしら他人事のように夢のようでした。たったいま戦犯軍事法廷に呼び出されて死刑と有期徒刑八年を言い渡された時も何の『ショック』も受けなかったし、審判長の言い誤りか、自分で聞き違えたのではないかと疑ったほどでした。行きには穴倉の中を歩くような蒸

し暑い天気であつたのが帰りには大粒の水滴となつてポツリポツリと落ちて来て遠慮なく顔に叩き付けて頬を伝わり、行き交う支那人が皆ジロジロと振り返つて見るので、涙と間違えられてはと思いながらも後手に縛られているためハンカチも使い得ず、今まで四回往復した法廷から戦犯拘置所までの三十分の道程を何時もより遠く感じましたが、しつかりした足取りで歩いて帰りました。

拘置所へ帰つて足枷あしかせをはめられた瞬間——本当は時間的にその瞬間とはつきりと意識したわけではありませんが、これまで時々抱いた小さな不平不満がすっかり吹っ飛んで一寸した人の好意までが無性にありがたく感ぜられるのも不思議です。広田隊長が白布を持つて来て『君のような立派な男をどうしてこんな目に会わせなきゃならんのかなあ、済まない、済まない、古禪ふるぜんどしより外に布がないからこれで我慢してくれ。きれいに洗つてあるからな』とオロオロ声で言いながら足枷の金具に布地を巻いてもらつた時は『こんなに優しい隊長がどうして憎まれようか』と思い、ありがたく済ま

なさに声をあげて男泣きに泣きました。

気がついたら剣着鉄砲で監視をしていた周囲の四五人の兵隊もみんなポロポロ涙を落として貰い泣きをしておりました。兵隊たちの親切も身に沁みます。二週間ほど前に警備交替に来た支那兵——といっても程度は案外よく概ね支那の中学校卒業程度（日本の高等学校卒業程度）の連中で家庭的にも恵まれた連中が多くみんな字が読めますし、六ヶ月の教育を受けて少尉に任官するのです。学兵と称しております。彼らも人情には変わりはありません。独房に移された僕を見舞いに来て覗き窓から『希望を失うな』とか『心配して病氣しないように』と慰めの言葉をかけてくれますが、相手になって話しているうちに『なぜ貴兄は捕まる前に逃げなかったか』と聞き『悪いことをしていないから逃げる必要はなかったのだ。それに上官や友人を捨てて逃げるのは卑怯者だから……』と言うと、彼らは感激してまた『力か金かどちらかがあったらなあ』と言つて残念がつて泣き出してしまい、今度はこちらが慰めるのに骨を折るのです。張という二十歳になる

学兵のごときは夜中にそつとやつて来て『貴兄は立派な人だから逃がしてあげたい』と言うので、こちらが驚いて『有難う。有難う。逃げたいとは思わないのだ。それに足枷を嵌めていては逃げられないよ』と笑つて答えると『そんなもの釘一本で外せます。もし逃げたければ、そつと準備をしておきなさい。私が夜間立哨しておる時なら何時でも鍵をあけてあげます。貴兄のような支那語の上手な人は一步拘置所から出たら絶対に捕まることはありません』と言つて泣き出しました。

お父さん、お母さんこんな学兵にどうして迷惑をかけることができましょう。

支那人は実に可愛い民族です。このことだけでも僕は支那人を憎まず、冤罪を怨むこともできません」

（元憲兵曹長。昭和二十二年十一月十四日中国済南にて刑死。

二十八歳）

本書を編集したのは当時大正大学教授で巣鴨教師師だった田嶋隆純氏。田嶋氏は、序文のなかで「すべての人が言葉をつくしてその父母妻子に切々たる情を伝え、

身の潔白を叫ぶのも寧ろ遺族の将来の為に汚名を除かんとする努力なのであります」と記しているように、世間の一切から誤解さえ伴いつつ見捨てられ見放されて死刑に臨む覚悟ができた人間にとつても、家族の将来のことを思うと、謝罪、贖罪のしようもないさいなまれ方をし、客観性のない「冤罪」を訴えることになる。三島由紀夫が死ぬ時、ただ一つ気がかりなのは、自分の子が将来、あした死に方をした三島の子として見られること、それがたまらない、と言ったことと同種のものである。戦犯刑死者たちは三島にはない深刻度で家族を慮っているのである。

「冤罪」を訴えても本質的には刑を受け入れている。であればこそ、他人の好意をおそらく死刑宣告を受けた者でなければ覚えられない素直さと感激で受け止め、甘んじて刑場の露となろうとしている。

遺書の主については本名、出身地は省くとして、引用にさいしては、お気づきのことと思うが、語句はほとんどそのままにしつつ、仮名遣いだけを現代ふうにおしている。「支那」について、「中国」に改めておきたい神

経がはたらくが、やはり原則通り原文通り。最近石原慎太郎が「もともと支那は悪い言葉ではない」と言って、中国人の抗議をはねのけ、あえて著書でも「シナ」を使っている。秦がなまって欧米でもChinaというではないか、といきまいているが、日本における「支那」には、日本の侵略戦争をつうじて血と泥のにじんだ歴史的経緯がある。カタカナ表記にしようと、日本の軍部が「支那」に侮蔑と嫌悪をこめ、殺し尽くし、焼き尽くし、奪い尽くすの三光政策をはじめ、生体実験など口にさえできないような蛮行をおこなっており、したがって中国人はこれに憎悪と怨恨の感情を抱いている事実は隠せないのである。石原は自らの感情的反中国論から使っており、侵略戦争の蛮行を無かつたことにする意図をもっている。そういう意図などまったくないと言つても、吐かれた言葉はそういう意味をもっている。重要なのは、そういう石原を人気政治家にしているという日本の現実があり、同時にまたそのために石原が人気政治家になっているとも思えないのが現実であるということだ。私に関するかぎり、石原の影響で支那という言葉をつかいだした例を知らない。

例その二

「父母上永別の日が参りました。故郷を出て五星霜^{せいそう}、その間心にもなき御無音の数々何の孝養も尽くすることができず、二十七歳の薄命を終わり、最後まで不幸の連続でした。何卒お赦し下さい。深浦の波止場に万歳のあの朝の父母上、一同の顔が眼にちらついて参ります。現世の最後があ感激のお別れとは。しかしこれが人間の運命でしょう。今日を限りの生命、父母上と再度まみえることのできない永別の便りを書いていきます。はるか故郷を拝して思い出を辿っています。これが最後で当地在同胞諸氏の盛大なる送別会をして戴きました。我々隊長以下四名は明朝刑場に行きます。元気で。最後に臨んで何も言うことはありません。父母上の御健康を祈るのみ。どうかお身体を大切に余生を全うしてください。私は二十七歳の薄命を終わっても幸せな人生でありました。父母上の尊い御慈愛に依って不自由を知らず楽しい恵まれた生涯を送らせて戴きま

した。その御厚恩にお報いもできずに逝くことをお赦してください。私の一身上については何も御心配なく全て清算してあります。なおこの度の状況も追々にお解りになる事と思います。戦友や親しい知人に委細詳しく依頼してあります。父母上、一同の御無事な便りも拝見して何よりも安心して逝けます。灯りの薄暗い独房で今この便りを書いております。私達のために同じ運命の死を控えた戦友が最後の演芸会を盛大にやつてくれています。私も最後の声を張り上げて唄う心算です。父母上に届けよと願わしい気持ちで……。必ず届くでしょう。私がいつも夕暮れに家の裏の畠で沖を眺めながら歌を唄ったあの場所に私の姿を思い出してください。なつかしい場所です。きつと魂はあの場所に帰ります。父母上、私の出発の時造った船も古くなったことでしょう。幾転戦で鍛えた力の限りを父母上に仕えん事を希うておりましたが、できません。どうか御身体大切に御用心なさいますよう決して御無理をなさらないよう呉々もお願いします。母上様は胸の持病で苦しんで居られましたね。くれぐれも御身体を

大切に。

何を書いても尽きません。急の旅立ちで叔父、叔母様には別書を呈しません故、何卒よろしく御伝えください。

最後に遺髪を同封します。左様なら

昭和二十三年四月七日

父母上様

(弟へ)

生まれて二十七年、現在までお前に便りを出したことがない。いかに不誠実な兄であつたかが解る。残念なことにはこれが最後とも初めともつかぬ便りとなつてしまった。入宮以来今日まで五星霜、その間毎日のようにお前のことや幼い弟達のことを思い出さない日はなかった。しかしお互いが元気でいたためか常に安心して呑気者の俺は都合がよかった。何も言うことも聞くこともなく従つて便りなんて思つたことがない。それだけ誠意がなかったともいえる。現在俺は元氣な日々を送っているが、思い起こせば今日より丁度百十

二日前に死の判決を受けているのだ。たぶん今頃は家の人々も知っているだろう。判決後出した詳しい知らせが今頃届いていることと思う。

一同元気で暮らしているとのこと何より安心した。終戦後慌しい三カ年が過ぎ去つた。許されない環境におかれて所在さえも知らすことができず、やつとその苦境を切抜けた時はこの始末、詳しい事情は書き尽くすことができない。おいおい当バタバヤ(現ジャカルタ)から引揚げる同胞の方々からお聴きしてくれ。戦友や知人によりしく頼んでおく。今より五年と二日前深浦の波止場に万歳のあの訣別の日が現世の最後になるうとは、かねて覚悟せし身なれど幾転戦武運拙く今日変転極まりないこの現世をみるに至つた。総て敗戦の悲運によつて左右せられた一命とはいえ余りにも過酷である。これも時代の流れとあれば止むをえん。これが俺の本来の姿である。短い生涯において何も兄らしいこととしてやれなかつた事を後悔している。今更遅いことであるが赦してくれ。幼い弟達もそれぞれ成長したことを思う。父も寄る年波お前が一家の支柱と

なつて〇〇家を守ってくれ。俺が願うまでもない。人間しつかり生きることが何よりだ。

俺も過去幾多の転戦において随分忙しい危険な任務を果たした。働けば働くほど苦しみも大なる喜びとなる。一選抜のトップを前進し続けた二年四ヶ月の軍隊生活、一兵卒として恥かしくない御奉公をしたと思う。真面目の上に馬鹿がつく。その結果がこうとはいえないが、當時を回顧すれば一〇〇%の殆んどが影響していると思う。むろん俺にも欠点はあるが何しろ世の中がひっくりかえつたような現世なのだ。よくよく時世を判断して俺の現在の結果をみてくれ。最後に及んで俺の総てを信じてくれる肉親のあることが何より心強い。俺はこんな悲惨な生涯を終わるけれども自分自身の良心に決して恥じない行動をとった心算だ。人間である以上良心を持つからには後悔もまた懺悔もあるだろうが、自ら正しいと信じて果したことはやはり死の直前までも正しい。その不変の気持をしつかり持つて死んでゆけることは何よりの安心だ。人間死の境地に入つて始めて恐怖を知り、また悲しみを知る。またいっぽうそ

の恐怖や悲しみを避けたために安心を求める。それは自分の死が十中の十決定的なものと覚悟してしまう時は安心して死んでゆかれることを願うのだ。

おかげでお前の無事なる帰還を聞くことができた。一家は元氣である。祖国復興の目覚ましい情報も聞ける。又こうしてお前に便りを通じて俺の思つた気持を告げることができ、気持が清算され、自ら慰めることによつて安らかに死んでゆくことができると思う。つい二、三日前七名の戦友は刑場の露と消えて行つた。名もない遠い国に旅立つように笑つて手を握りお別れをした。その時は胸に迫るものがあつた。やがて俺もこうして永遠に別れをする日が来るのだ。

二十七年の過去を振返れば何だか総ての思い出が夢のようである。振返つた瞬間が夢から醒めたような氣持だ。そしてまた永遠に醒めることのない夢の境地に入つてゆくのであらう。どうか兄弟仲よく幸ある人生を全うしてくれ。お前達の将来にも困難はあらう。それは世の常だ。如何なるものも乗越えてゆくところに生き甲斐があり、偉大さがある。愚かな俺が言うまで

もないことと思う。あくまでも自力で生きること

忘れてはならない。顧みることなく平々凡々と送った過去が悔やまれる。どうか俺のような人生を歩まないように良く学べ。道を広めんがために幼い諸弟のあることを忘れず総てをお前に依頼して俺は元気で逝く。安心してくれ。取りとめもないつまらぬことを書いてしまった。いろいろと書きたい思い出もあるが果せない。これまで書いた時、刑場へ行く知らせが来た。明朝昭和二十三年四月八日だ。元気で逝く。家のことをしつかり頼む。叔父、叔母上様、御一同によろしく。バタビヤの地下で一同の幸を祈る。十分お身体に気をつけて俺の分まで父母に孝養頼む。左様なら

昭和二十三年四月七日」

（元漁業。元陸軍伍長。昭和二十三年四月十日、インドネシア

「バタビヤ」にて刑死。二十七歳）

「元気で逝く」

戦犯で死刑になる人でなければ出てこない矛盾した辞世の言葉であろう。最後の最後まで家族を思いやる精

いっぱいの気持からであろう。

遺書は、日記、手記、随筆、詩歌、書簡、伝言などのかたちだが、このように長文を紙にしたためたケースは幸運なほうである。同じ紙でも、包装紙、トイレットペーパー、書物の余白、余白を切り取って貼りつなげたものが多く、そのほか敷布の断片、シャツ、ハンカチーフ、板等もあり、大部分は鉛筆で書かれ、血書まであった。「戦犯刑務所は巢鴨の外、大陸南方諸島五十余個所に及ぶが、その大半は筆紙の所持を厳禁し、或いは筆紙を与えても処刑後遺稿を没収した。また監視の眼をくぐって書き遺されたものの、現地に秘匿したまま遂に持ち返れなかった」（後記）。言語に絶する不自由のなかで何としてでも書き残して置きたかった意志が読み取れる。

それぞれに自らの死を達観した刑死者が多い。庶民もエリートも、所詮、戦後の流行語になっていたように「風にそよぐ草」だった。自らの思想によってではなく、「国家のため大君のため」という強制と風潮によって戦場に駆り出された庶民は、善良で真面目であればあるほど忠実に懸命に働き、その結果として敗戦後に戦犯の疑いで

逮捕拘留され、裁判の後、死刑になっている。「一選抜のトップを前進し続けた二年四ヶ月の軍隊生活、一兵卒として恥かしくない御奉公をしたと思う。……………自ら正しいと信じて果したことはやはり死の直前までも正しい。その不変の気持をしつかり持つて死んでゆけることは何よりの安心だ。」

冤罪の訴えとは逆に自分のしたことを積極的に主張し、勝てば官軍、負ければ賊軍の論理で自分を納得させている。この「安心」を幸福と解釈する人もいるだろうし、むごたらしいと顔を暗くする人もいるだろう。

しかし、刑死者が家族を思う心に変わりはない。「名もない遠い国に旅立つように笑って手を握りお別れをした」というのも、その一つだろうか。文学作品ならば、感心させられるところだが、これはフィクションではない。

いや、案外そういう別れかとも思うが、その後に訪れる無限の静寂を想像すると、ぎくりとさせられるような、無性に悲しくなるような思いがする。

死刑の方法は絞首刑か銃殺。「事故」とか「自決」というのもある。

内面の整理がつかず、達観できなかったエリートも少くない。それらはそれ故に凄惨な感じにさせられる。

例その二

「昭和二十二年六月二十五日（水）」

食料がどうなろうと貿易がひらかれようと、巷に強盗が横行しようと、政界に異変があろうと、台風が来ようと来まいと、そんなことは一向おかまいなしで我等の裁判バスはひた走りに走るのだ。その護衛のものもしきにはあぎれてしまう。仰々しいにも程がある。護衛なくとも逃げるものなぞ一人もありはしない。逃げるくらいなら何でもこんな所へやって来るものか。本来の日本人はそんなひきょうな手合いは一人もいないのだ。骨抜きにされたとはいえ、まだまだ日本人には気骨のあるものはおるのだ。巢鴨の住人が案外いちばん日本人らしい日本人かもしれない。地方人はもう大分と曲解された民主主義とやらにかぶれておるようだから。時々思うのだが大地震でもあつてあのレンガ造

りの裁判所の中がつぶれてしまえばよいと思う。バスが大衝突でもして木っ端微塵にけしとんでしまいたい。さすればつまらないことをくよくよ考えることもないし未来永劫に俗世界の浮世の風に当らないですむのだ。が。

昭和二十二年七月十一日（火）

日本人は何もわからぬオツチヨコチヨイだから、すっかりもう占領軍になつてしまつて要するにうまい具合に飼われているのだ。この頃の新聞のあらゆる記事に出ている占領軍とくに米国に対するエゲツナイようなオベツカ使いのざまは何だ。新聞社の社長殿を追放する前に記者連中を全部追放してもつと実質的な土台から建直しをせねばならぬと思う。今時大きなことをぬかすのを自由と考えて勝手気ままにほざいてるのは真の勇者でも何でもない。いま沈黙を守っている人々に真の国土がおるのだ。国土とは日本を本当の意味のよい国家に建直してくれる人を指すこと無論なり。

昭和二十二年七月八日（火）

裁判所の庭に日本人の子供が二、三人集まっているのが眼についた。乞食同然の姿で親が無く野宿していることが一見して知れる。米兵から食物でも貰うべく群がっているのだろう。私は涙が出て仕方がなかった。それらの一人は米兵の靴を磨いていた。米兵は悠然と片方の足を前につき出して磨かしていた。憐れな姿だ。このような姿は私が朝鮮でしばしば見た姿で、その時はこんなに強く感じなかった。かつての其の朝鮮人の姿が今は日本人にうつって来ているのだ。四等国民と言われても仕方がないのか。子供よひがんでならぬ、すくすくと育ってほしい。卑屈になるなかれ。国民に食わしてやる政府は一体何時来るのだろう。

昭和二十二年七月二十二日（火）

この裁判は明らかに復讐なのだ。戦いに敗れたものの当然受けるべき制裁だ。復讐であればこちらにも考えはある。思いしらしめる時の来るのを信じて疑わぬ。

今日の裁判では大森とかいう若い医者が出場した。昭和十九年九月に東大を出たというからにはさして内科の権威者とは思われない。私はまた大学教授級のも

のが出て来るかと内心おそれていたが検事がどこから拾って来たのか知らぬが若造であつたのでほつとする。しかし検事は実にしつこい奴だ。刑務所におつた人間の責任を収容所の軍医におしつけようとする腹がわからない。復讐なら復讐だとはつきり明言したらよい。我等も男だ。いさぎよく復讐される用意がある。通訳は医学語になると頼りないものだ。全然だめだと言つてもよいくらいだ。この調子では子供に言つて聞かせる程度の話振りで医学を解説せねばならない。益々骨が折れる問題である。

昭和二十二年八月二日（土）

時計のいらぬ生活、希望のない生活、生甲斐のない生活、そして笑いのない生活、これが一年八ヶ月経過した。これでも人間は生きておれる。尤も肉体的には随分弱つて急には立ち上がれば目まいがするし、ちよつとはたらきに出されれば疲労が早くて長つづきせぬ。そして更にいやなことは常にゼーラーの顔色をぬすみ見ては仕事をごまかすことばかりやっている。何となさけない姿であろう。四カ年の刑を喰つた者も

今裁かれる者もひとしく来年には帰るんだとうそびている。講和条約は来年中に締結さるる見込みでかく言っているらしい。

昭和二十二年八月八日（金）

八月七日の朝日の第一面に「六日午前八時十五分平和への第一弾が破裂して丸二年広島は平和祭を催した云々」と掲げマックアーサーの写真入りでメッセージを載せている。考えて見るとおかしくて物が言えぬ。「平和への第一弾」とは何か。日本がこの原子爆弾を投下されても之を非難する新聞記者が一人もない。新聞はことごとく当時の軍の方針を無条件に賛成して拍手を送つて激励したではないか。忘れたとは言わせない。今になってこんな進駐軍にへつらつた言い方をする骨なしの日本記者はことごとく撲殺してしまうべき非国民だ。開戦当時私も長年の憂憤を晴らして思わず万歳を叫び快哉を絶叫した。何等恐れず堂々と告白をする。誰が何と言つてもこのことには相違あるまい。しかし時世の移り変わりとともに人間の考え方も変わつて来るのは私も認める。だから新聞記者は「当時

我々も明らかに政府の方針に拍手を送った者の一人である。それに対しては率直に責任を感じるものである」と大騒ぎしているのを聞くに忍びず、窓越しに向いのビルのかすかに見えるオフィスガールの動きをぼんやり眺めていた」

（元医師。元陸軍軍医少尉。昭和二十四年二月十二日、巢鴨にて刑死。三十四歳）

ここに採録された部分は、死刑判決前という事情がある。罪状については一切触れられていないが、軍医ということからすると、かなり忌まわしい事件と思われ、そのため焦燥と不安が大きかったことも想像される。が、このことを割り引いても当時のエリート意識がどのようなものであったか、垣間見ることができよう。

しかし、死刑が決まり、刑場に臨む日、遺書のなかでは、

「父上よ、くれぐれも不孝の限りをつくして世を去るを許して下さい。このことが最後まで私の念頭を離れません。いずれの時には父上と一緒に平穏なる生活を

営むことを唯一の楽しみにして営々、父上も私も出来る限りの努力はして来たのですが、遂に叶わず願ひ此処に至る時涙がにじんで来ます」

例その四

日本的に辞世の歌も多く遺されている。各地から一部を拾ってみる。

軽き身に重き罪をば負せられ今日ぞ発つ黄泉の旅

あしざまにののしられつつ外国に

首絞められて我果つべしや

手錠はめて庭に座りて大声に我死刑囚と叫んで見たり

炎天に草をとりつつしみじみと

祖国のことを偲ぶときあり

裁かるる朝の独房を起き出でて

外面をみれば美しき草花ぞ咲く

国の為つくせし事のあだ花と

散り行く我はあわれなりけり

いくばくもあらぬいのちと知りながら

めし食う匙をつくる哀しさ

殺すなら早く殺せとつめよりて

青き目玉をにらみかえしぬ

今宵限りと知らで故郷の人々は如何に吾を待つらん

をのきも悲しみもなく絞首台母の

笑顔をいだきてゆかむ

君がため咲きほこりたる山桜夜半の嵐に散るぞ悲しき

あの世とは全く此の世と別なもの

えんま大王と語る元戦人

思いきや戦の庭に散りもせで裁きの庭に嵐吹くとは

言の葉に生死は一如と知りつれど

迷いの門に我身は迷いつ

散り逝きし友白壁に遺したる三十一文字や紅にして